

《女の運動》が示唆するもの

アイルランド問題とは何か

ワット・タイラー

「それじゃああなたにきくが、カトリックとプロテスタントが隣りあって住んでるところがいっぱいあるぜ。ところが殺しあつてゐるかい／＼ないだろう。違ふ宗派が殺しあう裏には、必ずポリティックが操つてゐるのさ。」

はじめに

北アイルランドの紛争は「宗教」問題ではなく、植民地問題である。植民者と先住者との「人種的」区別（もはやそんな区別は二百年程まえに解消して存在してないのだ）が、宗教的な違いで示されるのである。だから新教徒と旧教徒が争う場合、それは宗教的な原理を守るために争っているのではない。社会的・政治的現状を維

持するの、打壊すのかという点で争われるのである。英帝国によるアイルランドの侵略と植民地化は、十六世紀に始まった。先住者たちは、次第に内陸部へ押しやられていった。

一六四九年に、オリバー・クロムウェルの議会軍（新教徒）が、国王軍（旧教徒）の兵士を打ち破り、先住アイルランド人の多数を大虐殺し始めた。この虐殺以後、アイルランド全土に及ぶ大規模な土地没収は、新しい地主階級を成立させることになった。それらは欧州全土に及ぶ、特に英国での、激烈な宗教戦争を背景として、植民地化は進行した。そのことから宗教が、一方での土地を奪われた先住者、他方での侵略者を区別する印の一つとなった。

十六世紀アイルランドは、部族時代以来の伝統的信仰

である旧教を残していた。アイルランドで新たに土地を与えられた植民者は新教徒であった。こうして信仰上の区分が、搾取者を被搾取者から区別する記章となったのである。

英国侵略の主な結果は、百パーセントが旧教徒である貧しい地方に、新教徒の少数の地主支配階級を作り出したことにあった。これら支配者は、その信仰の故に罰したり、新教徒となることを強いるのではなく、旧教徒が、財産、土地、影響力或いは権力を獲得するのを妨害する為に、旧教に対しての刑法を制定しはじめた。こうして差別の社会的・政治的本質が、あらわにされたのである。この態勢は、今日に至るまで、アイルランド全土でなお支配的である。

一八〇一年の連合法は、ウエストミンスターに單一議會を置くアイルランド・英国両王国の連合をつくった。

これが連合王国である。しかしアイルランドは依然として植民地のままであった。十九世紀中頃、アイルランドに大飢きんが起った時、英国政府は、災害をくい止める努力をほとんどしなかった。

そして飢きんの最も重要な影響は、北アイルランドの現在の状況に係りのある限りでは、この飢きんの余波か

ら起ってきた。つまり、貧しく半餓死状態のカトリックたちが農地をすて都市、とりわけベルファストへ大移動したのである。ともかく彼らは、どんな低賃金でもまず働かねばならなかった。このことが、プロテスタントの貧困層を脅えさせた。こうして、最初の激しい宗教的暴動が、飢餓以後の十年間に始まった。しかも政府は、この飢餓の影響を緩和する政策をほとんどとらなかった。こうして労働者階級の間での宗教的派閥と対立が発生し、それが今日まで続くことになった。

さらに新教徒の支配権を維持しようとする狂信的党派「オレンジ団」(現在も、新教徒政治家がメンバーになっている)は、空腹をかかえた旧教徒に対立する新教貧困労働者を引き込むことで、その対立をいよいよ激化させるものであった。社会主義が欧州全体に拡がり、産業労働者を政治活動の可能性へと目覚めさせている時にもアイルランドの労働者はこうして宗派的に分断されたままだったのである。

アイルランドで、アルスター地方は新教徒が多数派を占める唯一の地区であるが、一九二〇年十二月、アイルランド政府法が通過し、北部六県の独立した議会が設立された。島の人口の三分の一が、全島の五分の一の面積

に集められているこの地域が北アイルランドと名付けられ、スコットランド、ウェールズ同様に英連合王国の構成部分となり同時に自治国となった。その分割は、もともと経済が発展した地域を含み、しかも同時に英国との連合の支持者が、二対一の割合で安泰な多数派を形成する様に図られていた。その後、一九二二年にこのされた南部政策により入れられた。...

北アイルランドの社会条件

この連合主義者政府の政策は、徹頭徹尾、英国本土の発展と緊密な関係を保つことであつた。

だがそのことは、戦後イングランドの急速な社会変化とりわけ労働党内閣の成立や福祉国家政策の導入などと共に、依然として保守的な北アイルランド政府の旧教徒抑圧を続ける政策に、多くの矛盾を生み出した。北アイルランドでの旧教徒の失業率は同地域全体の失業に比較して、常にはば二倍であつた。

従来これが、移民への圧力となつた結果、これまでの

旧教徒の高い出生率にもかかわらず、両教徒の人口比は安定的に保たれていた。しかし社会給付の導入は、その移住の必要を減少させた。それは直ちに旧教徒の人口増加を脅威とする煽動と結びつき、労働運動をはじめとするあらゆる分野での、新旧教徒の対立分断をつくり出す

飢饉の三〇年代（一九三〇年代）は、連合主義者である支配層に、最初の現実的脅威をもたらした。失業は二五%にも達し、労働者は、政府に対するパン寄こせ行進（飢饉行進）や連日デモを新旧両教徒が一緒になつて行つた。政府の敵は、もはや、旧教ではなく、国内多数派である新教徒労働者であつた。だが政府は、失業や飢饉やその他の問題のすべてが、旧教徒労働者に原因あるとする宗派的犬儒煽動で、問題の焦点をすりかえ、両派の対立を呼び起すことで危機を切りぬけたのである。

北アイルランドのこのカースト体制は、次の様なものの複合によつて一層強化された。つまり、旧教徒に対する（政府によつて助長された）雇用差別、会社・商店（ほとんどが新教徒の手に握られている）に特別投票権を与えることでの選挙体系の操作、さらに、ゲットトの条件を作り出す様に仕向ける地方自治体財源の操作。

この様に新旧教徒間の相互不対立を維持することが北アイルランドの政治制度の礎石であった。「旧教か新教か」は北アイルランドでは基本的な区別となり、アメリカでの「黒人が白人か」の区別が及ぼすと同じ程に広範囲な影響を行動と態度に及ぼした。学校も社会活動も分離され、居住区は厳密に分け隔てられていた。宗派を越えての結婚はまれであった。これらの全てが両社会の地位の間にある常に非常に明確な、経済的差違によって強化された。そして人口の三分の一である旧教徒へのこの基本的公民権の否定は、一九六〇年まで続いた。

しかしまた一方、当然のこととして英国及び欧州労働運動の影響下に、北アイルランドの労働運動の内部にも社会的範疇を、社会階級で再定義しようという傾向が強まり、政府の宗派的な基礎は次第に弱体化していった。

またイングリランドで労働党政策によって創り出された社会民主主義制度の浸透も、連合主義者体制の政治構造を次第に浸しよくしていった。この二つの力が一九六〇年代後半になって、市民権運動へと収束していった。

一九六五年以降は、北アイルランドに急激な社会変化が起った時期である。一九六七年に現われた公民権運動は、英国政府が一九二〇年に定めた宗派色の濃い法体系

を崩壊させる最初のきざしであった。

一九六九年、ベルファーストとデリー（ロンドンデリー）での激烈な闘争の発端は、八月十二日であった。この闘争は数日のうちに英国の干渉を招き、英国の兵士が北アイルランド政府に代わる事になった。衝突がこの日に始まったというのは一六八九年のこの日に、新教徒勢力によって旧教徒の包囲からロンドンデリーが解放されそれをデリー市が毎年祝う記念日だからである。（ベルファーストと北アイルランドの残りの都市の違大な日は、七月十二日、つまりウィリアム三世が一六九〇年、ボイン河の戦いでジェームス二世の旧教徒軍を破った勝利の記念日である）この十七世紀の事件が、新教徒のそのご優位をもたらす転機となったことにおいて今日のアイルランドにとって大きな意味を持っている。

公民権協会（NICRA）と

人民民主主義（P.D.）

北アイルランドに対して、いま私たちが抱く一般的な印象は、ごくたまに新聞にあらわれる事件の報道などによって受けるものに限られている。そのなかでも、左翼的立場の人々に特徴的なのは！其処では、勇敢な革命勢力

が、豪胆なIRAを先頭に、陰險な反動勢力、つまりプロテスタント大衆及び彼らの軍事的政治的代理人と闘っている、というイメージである。

だが問題はそのように単純ではない。そしてほとんどそのように、えがき上げられたイメージは誤っていると云ってよい。そこでアルスターのバリケード決起前後からあらわれたアイルランドの社会的諸勢力のより正しい実像と、それらの歴史的起源及び一九六〇年代の公民権運動(CRM)の誕生と消滅以来の両極分解について説明してみたい。

まず、CRMのリーダーシップをとったNIORA(北アイルランド公民権協会)が、一九六七年二月に設立されたとき、北アイルランド政府は、その運動を純宗派主義的な、カトリックの運動にとどめるべく、あらゆる手段をとった。例えば、デモのルートひとつとっても、カトリック居住区域しか許可を出さなかった。それは、北アイルランドの大勢を占める貧しいプロテスタント労働者達に波及することを、政府がおそれたからである。そして政府は、プロテスタント労働者たちにカトリック教徒の権利拡大はプロテスタントの権利縮小を意味するという誤った観念を思い起こさせることによって、分割

支配に成功した。

もっとも、この策動が無かったとしても、「公民権」運動は、純カトリック運動に傾いていったと考えられる。というのは、住居・雇用・教育・参政権など、大半の赤裸々な社会的差別は、北アイルランド政府の反カトリック政策によるものだったからである。

一九六八年十月、公民権運動のリーダーシップは、ネオ・マルクス主義者の「人民民主主義」(PD)に移った。この組織は、当時の公民権運動の指導者達が政府の公約の前に屈しはじめたと感じとった、ラジカルなベルファスト大学の学生達のグループとして出発した。

最初PDは、新・旧教徒の区別なくアッピールするよう非宗派の立場をとり、「公民権」ということばには直接触れることをさけた。

しかし、ごく最初の頃の会議で、「アルスターのカトリック教徒に公民権を」の要求を取り入れるよう提案され、それが採決されるや、カトリック教徒以外の人々が退場していった。この時からPDは、実際は、カトリック優位の組織となった。

PDは最初から政府と正面から対決した。しかし、それはこれまでのリベラル派の生ぬるさに対する、単なる

反発でしかなかったといえる。その結果、PDのキャンペーンは暴力を煽動し、今日までに約二千人にのぼる死者を出す出発点となった。

もっともそれは「B・スペシャル」として知られているファシスト的な、プロテスタント警察隊によるものであったが、北アイルランド政府は、一般プロテスタント市民の、反カトリック的感情を利用することによって、PDのデモ行進に対するB・スペシャルの血なまぐさい弾圧を合理化できたのである。

ここからはじまる北アイルランド政府、(そのうしろにある英国政府)の圧倒的な暴力に対して、PDの活動家達はただの勇敢さしかもたなかった。そして唯一の戦略として、ただ武装闘争のみがとられることになった。

今日、PDは宗派に関係なく全ての人民のための社会主義の建設という主張をおかかっている。しかし「一つのアイルランドを」という、共和主義者の主張を支持し、また一がいにプロテスタント労働者を「労働貴族」と敵視している点において、PDは、北アイルランド変革の力をもはや失ってしまったといえよう。

アイルランド共和軍 (IRA)

反動暴力はますますエスカレートする一方にあった。

一九六九年八月十二日(プロテスタント祝祭日)暴徒と化したプロテスタントと、一体化した警察・Bスペシャルによって、デリーのカトリック居住区域が催涙ガスと火炎ビンの攻撃を受けた。

アルスターの主要都市であるデリーとベルファストのカトリック居住区ゲットの住人たちは、それぞれが「解放区」をつくり、バリケードを築いて闘った。その事態をみて南のアイルランド共和国政府は、救援のために正規軍を(IRAではない)動員し、北との国境に軍隊を進めるところまでいった。

しかし英国軍隊がいちはやく北アイルランドへ進駐し占領をはじめたので、アイルランド共和国政府はその自己の立場を再考慮することを迫られた。こうして共和国が従来とっていた「アイルランドの南北分割に反対する」「北アイルランド在住の反政府のカトリックを支持する」という方針は、そのときから「二つのアイルランドの相互共存」という英国政府の植民地政策に合意して話

合うという方向へと動きだすこととなったのである。

ところでIRA（アイルランド共和軍＝共和国政府とは関係ない）は、永い英国統治下の抵抗のなかで生れた歴史によって、その名は民衆の間で伝統的に生きていた。

一九二二年アイルランド共和国が発足し、IRAは事実上根絶せられたが、五年後にはよみがえって弾圧をうけ、オ二次大戦中ナチスと同盟を結んだときも出現して、地下抵抗をした。六四年共和国政府は英国と、反テロリスト法案に合意し、IRAの本格的取締りにのり出した。とはいっても、それ自体ほとんど活動がなかった。で、ほとんど放置され規制を受けることもなかった。

一方IRAも五〇年代以後、温和な社会主義を標榜し五六年～五九年にただ一つキャンペーン活動をしただけであった。だから六九年八月、Bスベシャルがデリーのカトリックゲットを襲ったときには、まだ政治的軍事的準備が充分にできていなかった。IRAの抵抗の失敗によってゲットのカトリック住民の失望と不満が高まりそのことが七〇年のIRA分裂の直接的原因となった。

六九年秋、Bスベシャルは大虐殺の責任を問われ、組織上解体し武装を解除したが、銃の大部分はUVF（プロテスタントのアルスター義勇軍）やその他の極右翼組織に流れた。またBスベシャルの多くの部隊は、スポー

ツを装った「ガンクラブ」として再編成され、ガンライセンスを申請すると簡単に交付された。一方、八月十二日の大虐殺後、カトリック教徒たちは「自分らを守るために銃がいる」と感じ出していった。しかし銃をとるということは、小教者である彼らにとっては容易なことではない。

このような状況のなかで、IRAの内部に極端な民族主義傾向が、次々に主勢となってきた。それはアイルランド共和国政府の一部支配層の関心をひくものであった。彼らは共和国政府自体の内部で、資産家や大企業を代弁し、公民権運動のラディカルなリーダーシップを大要恐れていた。そして反動的、民族主義を伸長するために自分たちの指示に従って、英国の支配と暴力に抵抗しようとする者達に影響を与えたがっていた。こうして、IRAは彼らから秘密裡に、時には公然とした支持や金銭的な援助を得たばかりか、ヨーロッパ・中東などからの武器購入経路も獲得するようになった。実際のな武器の引き渡しは南と北の国境で行なわれた。米国在住のアイルランド人達も、武器や支援の大きな供給源となった。

もっとも、この援助を受けとったのは、IRA内部での民族主義をとるグループだけであった。そして、この

グループが、当然「北」で支配的となった。それは、彼らが英国進駐軍に、より実践的アプローチをしていった——もちろん銃でもって——結果なのである。

IRAの分裂と武闘派の意味

この時以来、IRA内部のこの武装闘争派は、自らをプロビイジョナル（臨時）と称し始めた。そして、一方反英国キャンペーンを始めて、すぐに行なわれた停戦後平和的大衆組織を主張してきたIRAの別のグループは弱体化しながらオフィシャル（公式）IRAと称して分裂し、別の道をたどっていった。このIRAの二つのグループは共に全アイルランド南北三二県の統一国家を主張しながら、その戦術は天と地ほどかけはなれていた。プロビイジョナルIRAの——プロテスタントを降伏に追い込むまで、爆弾攻撃をするという戦術は、しかし、結果的に二つの社会を完全に隔絶したにすぎなかった。とともに、カトリック社会自体の中にすら、恐怖の風を吹き込んだのだった。

暴力はそれ自体のダイナミズムを創り出すものである。闘争が暴力的であればあるほど、それに応じて、闘争の

肯定的成果は減少する。また暴力は弱さの表出とみることができ。明らかに北アイルランドの暴力は恐れのある物であった。

プロテスタント側にしてみれば、北のアルスターがアイルランド共和国に併合されるようなことになれば、プロテスタントとカトリックの優劣関係が逆転するという恐怖をもっている。また、一般カトリック側も「カトリックの問題」にきっぱりと決着をつけようとするプロテスタント反動家たちの云う「最終的解決」というものに不安をいだいている。一方の暴力は他方の暴力を呼びおこし、エスカレートしていく。このような状態の中ではおのずと「我々とやつら」意識は、さけがたく高まるだけだった。

体制、反体制のいずれにしても、暴力で頭がいっぱいという政治状況にあって、このIRAの英帝国主義に対する民族主義的な武装闘争は、さまざまな左翼組織の革命の（民族戦線）理論にとって、支持すべきものとしてあった。こうして進歩的な世界の勢力によるIRAを正義とする心情的評価と支持は一般的なものとなり、その一面、プロテスタント労働者は、プロテスタント側であることによって反動として見捨てられることになった。

(民族解放運動というとき、たとえば同じような意味で日本の近隣である台湾があり、その独立運動がある。遠いアルスターの人口百万に比べると、それは近い一千六百万人の問題である。しかし、ほとんどの左翼グループが、どのような意味でも台湾の民族解放運動に関心をもったり、それを正義とし支持するようなことは決してない。つまり中国本土(それが人民共和国と称されているがゆえに)台湾の民族解放はもはや反動であり、台湾人民は中国に帰属すべきもの——ということになる。左翼の論理は屢々このように御都合主義だ)

それにしても、プロヴィジヨナルIRAのもつ反動性は、カトリック教会の教義に従って、反避妊・反中絶をテコでも守りぬく、という彼らの立場。また、「ひざっこぞうをやる」——カトリックの女と、結婚前に性的関係を持ったということを知られた、男達のひざっこぞうを銃弾がぶちぬくこと——等の側面を知るならば、真に進歩的な人々の共感と支持を受けるに値しないことが理解されるだろう。

今日、アイルランド共和国で、ますます進みつつあるチリのような状況——このことは後に述べるが——およびI

RAの云う「アイルランド統一」が達成されたあかつきに、プロテスタントに選択の自由を与えない共和主義自体は、もともと労働者階級を分断するために、支配者階級が維持しようとするプロテスタントとカトリックの分断を受け入れたものである。それは仮にも人民を解放する社会主義的内容を含んではいないのである。

プロテスタント労働者のうごき

まず英国支配者階級は「パイが大きくなれば、分け前も大きくなる」と、つねにプロテスタント労働者階級に吹き込んだ。

次に、貧困と病がアイルランドを襲った、一八四〇年代の飢きんで、それだけでは明らかに不十分となった時南アイルランドでは、保主的なカトリック教徒の政治家と聖職者、カトリック大衆をアイルランド民族主義に改宗させた。それは、極端に反・英国的なものだった。北はプロテスタントが大勢を占めている。この状況の中から浮かび上ってきたイアン・ペイズリーのような日和見のデマゴークの政治家達は、近い将来に、アイルランド・カトリック国家の建国を見るようになった。もちろん

その国家とは、主都をダブリンにいただいた国家なのでそこでは、被差別少数者集団から差別多数者集団へ、被抑圧者から抑圧者へとプロテスタントとカトリックの現状が、単に置き換えられるにすぎない。

簡単にいえば、これへの恐怖が、北アイルランドのプロテスタント労働者階級が示している、いわゆる「反動的傾向」の根源といえる。しかし、一九七四年五月のゼネストに先立つ数々のストライキの連続を含めて、彼らの階級的行動は、カトリック労働者達のそれに劣るものではなかった。このことから、カトリックが支配するという恐れのみが、プロテスタント労働者の行動動機となっていたのではないとわかる。もし、それだけが動機であったとしたら、北アイルランドに存在理由を与えている大企業や資本家達に挑戦することは、不可能であったろう。プロテスタントの意識には、いつもその恐怖の要素は在るのだが、決してそれだけではない。

プロテスタント労働者階級のもつ「アルスター愛国主義」の幾分かは、たしかに南の排他的な、共和主義的文化に対する反動としてある。が、より大きな部分はその反動を利用したアルスターの支配者から、支配階級と被支配階級の利益の神秘的同一視——階級間協力幻想——を吹

きこまれた結果なのである。

このプロテスタントの労働者が、アルスター労働者評議会（UWC）を組織し、一九七四年五月十四日から二十八日まで、ゼネストを敢行し、北アイルランド全土をマヒ状態に落し入れた。この時UWCは、カトリック労働階級の家族にも、プロテスタント労働者階級の家族と同様にサービスを用意した。が、概していえば、当局はアイルランドの擬似宗教的違いを、労働階級の二派間の戦争に転化させるのに成功した。またその時、諸外国も含めた「左派」は、全面的に批難という反応を示した。その理由は、何よりも、それがプロテスタントのストライキだったからだ。かんじんなのは、このストライキが、北アイルランド政府の打倒をねらった（実際、そのねらいは功をそうしたのだが）労働者階級によって行なわれたものだといふことは見落されて、「北アイルランドのカトリック教徒を、社会的、経済的、政治的地位を、自分らよりもずっと下におし込めておきながら、ストライキをするとは何たること」と云うわけである。

資本家たちが矛一に望むことは、北アイルランド労働者が、カトリック、プロテスタントを問わず、両者共一番安い賃金で済ます状態の維持である。従って、爆弾投

げと、それによってもたらされる混乱にもかかわらず収益率は上り続けていた。結果は、工業生産は一九七三年連合王国内の一般的不況傾向に追いつかれる時まで上り続けた。最近の数字では、六万一千人または労働力の十一・七%が失業し、工業生産、雇用等の就職斡旋などが急速に落ち込みだした。

このような状況下で、北アイルランドのプロテスタント労働者階級は、乏しい食事と、支配者がそえた、神秘主義とロマンティシズムを混ぜたスープを食べつつけてきたのである。だが、決してプロテスタント労働者は支配者の本来の味方ではない。このことは、ただカトリックⅡ進歩的、プロテスタントⅡ反動的というアイルランドに対する誤った考えをすて去れば、おのずと明らかとなることだ。

アイルランド共和国

オ一次世界大戦後の一九四九年、南のアイルランド共和国は完全な独立国家となった。だが英国からのその独立を勝ちとるために多くの犠牲が、アイルランド人民の血によって支払われた。その間、アイルランド支配層に

よってかり立てられたナショナリズムは、狂信的なものになった。多数のアイルランド人民にとって、ダブリンにその本拠を置く政府がありさえすれば、もはやどのような性格のものであろうと、意にかいさないほどのものであった。

十九世紀中期の大飢きんによって、労働者と農民の多数が死に、道義は貧困のため地におちた。それはカトリック教会と権力が結びついて、支配体制をつくりあげる何よりの好機であった。住居や仕事を求める人々にわずかの救済を与えることで、政府は自らの立場と強い権力を確立した。国家Ⅱ教会の親密な関係は発展し、相互依存し、国家は法律に、カトリックの頑迷さの基本的諸点を、結婚及び離婚、産児制限、検閲等々に関して書き込んだ。この関係が今日どのように存続しているかを示すものとして、たとえばコークの司教はその相談に来る大多数が避妊に関する助言を求めている、結婚指導診療所を一九七四年にわざわざ閉鎖したのである。

社会主義者もまた、ナショナリズムの魔法にまどわされていた。ジエームス・コノリーは、サンジカリストとしてと云うより、まずオ一にナショナリズムの英雄とされた。(彼は一九一六年ダブリンで独立旗を掲げて立ち

上り、英国軍と血の一週間を闘った復活祭蜂起で、英国への反逆罪として射殺された）このコノリーらの傾向をうけついで社会主義者たちは、一九年プロテスタント労働者を中心に行われたベルファスト・ゼネストに対する黙殺以来、一貫して同じ態度をとりつづけた。これはサンジカリストの立場と原則を放棄した以外の何者でもない。（一方北アイルランドでの、プロテスタント労働者のストライキや社会主義は、カトリックの陰謀とよばれることで、どこからの支援もうけることがなかった。）

このようななかでアイルランド共和国は、その内実においてヨーロッパで最も反動的な国家の一つとして、自らを確立するのに専念してきたのである。

たとえばフランスのスペインが、一昨年初め五人のバスク独立の闘士を絞殺刑に処した。そのときアイルランドは、抗議の為に大使を引上げることしなかった数少ない西ヨーロッパ諸政府の一つであった。

さらにはほぼ同時に来訪したスペイン議会からの代表を歓迎し、スペイン内戦中のフランスの血のマドリッド入城の記念日の式典に、公式代表を送るという同盟ぶりであった。

七〇年にアイルランド共和国政府は英国と合意して、

「反テロリスト法」を施行したが、はじめIRA容疑者に重刑を課すということはほとんどなかった。大ていの者は非合法組織に加盟しているという疑いで捕えられ、しばらくの後に釈放されるかあるいは罰金を払って釈放されていた。しかし七二年に共和国政府は「特別軍法廷」を導入するに至った。北アイルランドから浸透してくる人民の武装闘争のエスカレートとその影響は、その闘争を自己の管理下においていないことによって、資本家や権力者にとって脅威であった。特別軍事法廷はそれらに対する対抗装置として、国家に対するあらゆる犯罪を弾圧する最上の武器となった。それは御都合主義的に非合法IRAを国土からしめ出すことに向けられると共に、とくにIRA以外のよりラジカルな活動グループに対する、残忍で容赦のない弾圧のために、何よりも使い出しついに七六年九月の全土非常事態宣言にまでなったのである。

（アイルランド共和国の反政府グループに対する弾圧は、昨年六月、新しい大地Vグループのメンバーでサンジカリストのノエルとマリー・マレイ夫妻に対する死刑判決で頂点に達した。（ウリニユースレターでも報じられたので、読者も周知だろう）特別軍事法廷は三人の判

事団が、国家犯罪で告発された被告を審理する。裁判は公開されず陪審人もいない。判決に対しては上告は許されず、一審が最終であり、被告には自らの弁護人すら選べない。

マレイ夫妻の場合は、逮捕されてすぐ三十時間にわたって殴打されつづけた。そのあとノエルは裸にされ、顔の水洗便所に突込まれた。その間たえず警官が、彼の顔に小便をかけ水を流した。マリイは隣室でノエルの叫びを聞くよう強制され、彼女の前に置いた自白に署名するまで許されなかった。

こうして彼らは一年前の銀行強盗犯人に仕立てあげられたが、その証拠は、唯一枚の自白書の署名であり、それは拷問によってつくられたものに外ならない。

二人の処刑はわずか一ヶ月後の七月九日と決められたが、たまたま報道がひろがって国際的抗議行動が世界的にひろがった。(アメリカやヨーロッパ各都市でデモが行われ、なかならず日本では二千通以上の手紙や葉書がアイルランド共和国大使館にとどき、共和国政府を狼狽させた)その結果処刑が延期され、ついで上告権否定の憲法違反性に対する上告が認められ、十一月になって、ノエルは無期、マリイには再審の決定が出された。それ

に対してその後どう推移したか詳細はないが、この二人と関連者グループの事件は、あきらかに連中がアナキストだということ、その政府を何よりも基本的な批判をしていることだけを原因としたものである。

女たちの平和運動

Fate Beall イモから作られるパンツはアイルランドの、素朴な珍味である。アイルランドの女達は北であれ南であれ、またカトリックであろくとプロテストントであろと、オーブンで「タティブレッド」を焼く。だから女達は、南も北も新・旧教のワケをも超えてタティブレッドを焼きながら同じように「平和」へのおもいを語りあうことができる。もう憎悪と闘争にあけくれる男たちに、運命をまかせておくことはできない——一九七六年八月こうして八女たちの運動Vは発足した。

一九六七年NICRAが発足したとき、北アイルランドのカトリック教徒の社会は、まだプロヴィジヨナルIRAの「グリーン・フアズム」(緑はアイルランドの色)の「テロ」や「判決」「リンチ」を経験していなかった。IRAはかってそうだったように攻撃者でなく人

民の防衛者として、必要なとき出てくる英雄と思われた
そして公民権運動は、人道的非暴力的方法で問題を解決
したいという、北のカトリック小教集団の希望を代表す
るものであった。

しかしNIOIRAは、まもなく宗派主義によって壊滅
に陥り、IRRAは唯一テロ戦術へと突入し、分裂した他
のひとつは無力なスターリニズムとなった。一方、プロ
テスタントの諸集団もまた、始末におえない狂信的な人
々の支配下で、局地的なマフィア的存在と化していった
このようななかで、「ウイミン・トウギャザー」(My
Women Together)と名のる女たちのグループが発足し

たのは一九七一年だった。次才にエスカレートする暴力
闘争に対して、カトリックとプロテスタントの女たちが
一しよになって、「暴力による解決は、真の解決となり
えない」と理性による平和を訴えはじめたのである。新
旧両教徒が一つの目標のもとに力をあわせることは、ア
イルランドの歴史をくつがえす画期的な出来事であった
それにもまして何よりも「女たちの革命」であった。

当然、それに対する男たちからの反撃が起った。しか
し彼女たちが最大の痛手をうけたのは同族の女たちから
のものであった。

つまりプロヴィジヨナルIRRAを支持する女たちから
はげしい物理的な攻撃をうけて混乱し、それは崩壊して
いった。

その後七二年、新しい事件がおこった。カトリック教
徒でイギリス軍隊に入隊したデリーの青年がいた。それ
をオフィシャルIRRAが捕え、反逆罪として死刑に処し
たのである。ことの結果を知ったデリーの女たちは、あ
まりのこととして抗議に立上り、オフィシャルIRRA本
部を包囲した。IRRAは女たちに妥協し陳謝せざるをえ
なかった。これを契機として、オフィシャルIRRAは英
国との停戦を、同じようにプロヴィジヨナルIRRAも休
戦を宣言するという状況が一時的に成立したのだった。

しかしそれはまた小事件が起る毎に、徐々につぶれて
いった。休戦宣言が有名無実となると、一たん引揚げて
いたイギリス軍隊が、ふたたびゲットーに侵入して、プ
ロヴィジヨナルIRRA狩りをはじめ、それに対抗するテ
ロが次才にはげしくなった。

七六年八月、イギリス軍隊とプロヴィジヨナルIRRA
が衝突したそのまぎぞえて、ベルファストで三人の子供
兄弟が殺されるということが起ったとき、女たちの運動
は、三たびよみがえった。

子供たちの葬儀は、町中の女たちによって行われ、八月二二日、一万人があつまった。そのほとんどが女たちだった。死んだ兄弟の母にあたる女性が「この悲しみと、無益な殺りくを絶対くりかえさせぬために、暴力を止めよの声を今こそあげよう」と訴えた。

この時以来、彼女らは、カトリックとプロテスタント両派の過激派から共にいつ何時でも殺す—という脅迫を受けつづけることになったのである。

だが、そのおどしにもかかわらず女たちは、引きつづく八月二九日、ベルファストに三万人もあつまった。それに呼応してダブリンでも四万人の女たちが集って、「暴力を止めよ」と口々に叫びデモ行進をした。

九月四日—一九七二年のその日にイギリス軍によるカトリック住民の虐殺がおこなわれた血の日曜日—デリーでも、カトリック・プロテスタントの女たち三万人が集って、「暴力はやめて」デモが行なわれた。こうして北でも南でも、全アイルランドの町で、たくさんの女たちが動きはじめた。それ以来、毎週末、一万から三万—四万規模のデモが、もたれるようになり、それはアイルランドだけでなく、スコットランド、イギリス、ヨーロッパ各国、アメリカ、カナダにもひろがって、女たちの、

△暴力をつかうなVキャンペーンがひろがることになった。

これに対し、九月末のデモの時、プロヴィジョンアルIRAは女たちの隊列を攻撃し、その言葉通りついに一人の主婦を射殺し、数人に重軽傷を与えるという事件さえおきた。そしてプロヴィジョンアルIRAが、この女たちの運動は、親英的売国の運動であり、それを行うものは殺す、と再び声明を出してきた。だがもはや女たちはひるまなかった。それどころか—そう多くの女たちが新しく隊列に加わりはじめた。女たちの運動は、すでに未踏の道に踏み込んだのだった。決してあともどりのない。

こうして二つのバリケードを越えて女たちはしっかりとつながった。支配階級が長い年月をかけて固めあげてきた憎悪と対立の「ニカワ」を女たちの運動は、まず女たちの間から溶かそうとしはじめている。そしてもし、男たちを岩のようにとらえているニカワが溶け、二つに分断されている社会がすこしでも歩みよって対立することをやめたとき、緑色（カトリックの色）であろうが、オレンジ色（プロテスタントの色）であろうが、宗派主義的な政治屋どもと資本家、それを守る英国の武装軍隊こ

それが、真に南北アイルランド人民の敵であることがはっきりと見えてくるにちがいない。

現在の女たちの運動の綱領は、きわめて単純で、その行動は暴力をつかうなVというネガティブなものにとどまっている。だがその行動を通じて次才にあきらかになってきたことがある。

それは何よりも才一に、国家政府、政党、宗派を超えて運動をすすめることであり、それらに依存も介入もゆるさないことである。才二に中央と地方の区別なく、むしろ地方的な草の根グループの連合をめざすことである。才三に、国際的戦略というかアイルランドだけにとどまらず諸外国の平和グループ、コミユニティグループとの連繋をつねに視野に入れて活動することである。

そしてこれは誰が云い出したというのではなく、その裏にはアルスターの大多数の民衆が痛感していたそのものなのであり、一方にはもはや手に負えなくなった武装闘争派とそれを利用する既製政治屋に対しての直接行動なのである。

もちろん既成の支配権力とそのとりまき共は、この非暴力直接行動が、現実的により強いものとならないように最大の努力をはらうだろう。と云うのは、彼らの地位

を持続させ、支配を確実に保証するものこそ「戦士」たちの無差別暴力攻撃にはかならずぬからだ。

しかしまた支配者たちはあまりにも社会がにえたぎり混乱することは好まない。純政治的にそれは悪い政治であり、自己の地位をあやうくする。

英労働党政府が一九七五年、とくに声明して「無審理拘禁法」を破棄したのは、この弾圧政策が、アルスター防衛連合(UDA)やアルスター義勇軍(UVF)といったプロテストタントの武装グループと、プロヴィジョンナルIRAの爆弾テロ抗争をもやむなしとする、一般の道義的支援を引き起し、いよいよそのエスカレートが高まるけはいをみせてたからである。

だから、その破棄は、これらの軍事行動を当局の容認できる水準まで落させ、またそうすることによって必要な暴力の水準を切りつめながら、二つの武装集団グループの存命を図るところにあった。

だがその政策は、まもなく失敗であることが明らかとなった。そのことで過去十年間、アルスターに育ってきた暴力的気分がどれ程のものか推測できるだろう。

女たちの運動は、新聞などがいかにもそれらしく書き立てているにもかかわらず、権力者どもからは好意をよ

せられてはいない。それどころか昨今では逆に、彼らの権威の基盤をはっきりとおびやかすものとなってきたことを知り、むしろどのようにすべきか、困惑的となりつつある。今後、それを封じこめようとする抑圧的な処置が出てくることは眼にみえている。その時、政府の切札は、愛国と忠誠に名を借りた宗派主義であろう。女たちの運動は、過去くりかえした歴史のごとく、また同じ結末へと転落するだろうか。女たちの運動が女であることにおいて、その試練をどうのりこえるか、それこそがアイルランドの未来をつくり出すものと云わねばならない。

最後に約言すれば―北アイルランドでも南でも、敗者はいつも労働階級だった。カトリック教徒自体ではなかった。もし社会主義的な諸運動が一九六七年に、「公民権」という限られた概念にでなく、全ての労働者階級の

直面している問題―住居、雇用、機会の欠如―に注意を払っていたなら、今日、状況ははるかに違っていただろう。不満の動きはあった―産業上のストや、家賃値上げ反対運動にである。しかしそれらは、宗教的国民的忠誠について、誤った意識にとらわれ、暴力の潮流におぼれてしまった。

「女たちの運動」は、新しい発展を代表している。これまで「男のやり方」で事を運んできた。男達が支配してきた舞台への、「歴史から隠されてきた」北アイルランドの、カトリックとプロテスタント両方の婦人の登場である。この意味で、この運動はひととき新しい革命的運動またはその方向性として理解されるべきであり、今後の推移は、注意をもって見守られるべきだろう。



- ① バルファースト
- ② ロンドンデリー
- ③ ダブリン
- ④ コーク
- ⑤ ロンドン(英)